地域実践領域

クリエイティブ・スタディーズコース

成安造形大学
大学案内2025

SEIAN UNIVERSITY OF
ART AND DESIGN
UNIVERSITY GUIDE 2025

CREATIVE COMMUNITY DEPARTMENT

CREATIVE STUDIES COURSE

地域実践領域の
学びのフィールド

農と食

普段食べているものの見方が変わる？

循環とデザイン

地域をデザインして豊かな暮らしを実現するには？

クラフトとなりわい

地域の素材でつくる仕事ってどんな生き方？

防災と日常

安心安全な暮らしは自然との共生から？

祭と祈り

地域のお祭りは絆を深める大切な行事？

地域という教室で

「考える」

「動く」

「創造する」

地域のキーパーソンとして創造的提案ができる人材を育成します。

人口減少社会を控え、未来の持続可能な日本社会を考えるとき、地域の活性化が大切な要素として浮かび上がってきます。地域に根ざす成安造形大学は、アーティストやデザイナーを輩出するのみならず、「地域」からの視点で芸術を捉え直し、質の高い働き手の供給により、地域全体のクリエイティビティ（創造力）の向上に寄与すべきであると考えます。

地域実践領域クリエイティブ・スタディーズコースでは、これまで本学が培ってきた近江学研究や地域連携事業をベースとしながら、芸術教育の特質を活かして、より具体的な方法で学生が地域に入り込み、現場で活躍する人が教員となって学生を育むシステムを構築。地域経済、環境、観光、歴史文化、伝統文化、食、各種素材、商品開発、農林水産業、福祉、まちづくり、地域行政など、横断的な学びのフィールドが広がっています。自分の仕事や人生について能動的に考え、自己の資質を向上させ、社会的・職業的な自立を目指すために必要な能力を育成します。

都市と農村

人と自然の境界ってどこにある？

福祉とつながり

地域住民が助け合い、共に生きる社会をつくるには？

推しとコミュニティ

推し活を通して人と人はつながっていく？

エコと旅

地域の魅力は、日々のくらしに隠れている？

地域とアート

まちおこしと地域アートの関係性って？

歴史とまちづくり

歴史を学び、今と未来をつくるには？

わたしが成長した、地域実践領域の4年間

農×デザイン

佐々木 良緒

（岡山県立岡山工業高等学校卒業）

地域と分かち合いながら
カタチにするデザイナーに

Q. 高校生のときはどんな生徒でしたか?
実家が岡山で農業をやっているのですが、中学生のときに加工品のパッケージのイラストを任せてもらえる機会があって、もっとデザインの知識や技術を学びたいと思うようになり、デザイン科のある高校に進学してグラフィックデザインを学びました。

Q. 地域実践領域を選んだ理由は?
父が主催していたマルシェや食育イベントの、地域の風土や色を地域の人と共有する空間が好きで、自分のデザインという手法をつかって地域と関わりたいと思うように。教育実習の先生が成安の卒業生だったことで地域実践領域を知り、ここに行こうと決めました。

Q. 授業の中で大変だったことは?
3・4年生でエコツーリズムの企画を実施したときに、この土地に住み続けない学生が地域に入って提案することは、ある意味で無責任な側面もあると感じたことです。地域の方にとって本当にいいことなのか、すごく慎重に進めるべき活動だと実感しました。

Q. 地域実践領域の魅力は?
感覚的に言うと、とにかく温かい領域、というところです。学びのなかで人と接することをすごく大事にしていて、コロナ禍ではあったけれど、領域の中の大学生活や課外活動で話す時間がたくさんありました。先生、助手さん、アシスタントさん、同級生で一息ついてお茶を飲みながらおしゃべりをしたり。この温かさは、みんなで話すことで醸し出されるものなのだと思います。

Q. 一番成長できたと思う部分は?
自分の内面や生き方を見つめなおせたことです。自分がなぜこれに興味があるのか、どうやって生きてきたのかと向き合いながら、自分が研究したい方向性に落とし込んでいくという流れがありました。それを繰り返すことで、自分の内面を知り、地域という外側に動いていけたと感じています。自分の人生や内面を振り返ることが、卒業研究論文を書く上でも中心になっていきました。

4年間の 実践と成長

高校で培ったデザイン力を発揮

高校で培ったデザイン力やデザイン思考を資料づくりや課題制作で発揮。地域のお土産を開発する課題では、農業とデザインを組み合わせ、実家で育てている岡山県の在来種のかぼちゃの種を、ポップで思わず手にとってみたくなるパッケージデザインに。地域の風土や気候によって形づくられた在来種の種を、残していくことにも貢献するお土産になった。

1年

岡山県瀬戸内市の在来種を他の土地に広げていく「種」のお土産「TUNAGUMI」。「実をつなぐ」という思いをネーミングに込め、裏面には栽培方法もイラスト付きでわかりやすく説明している。

自分が本当にやりたいことと向き合う

学生のうちにたくさん吸収したいという思いから、さまざまな講演会や学外の活動に参加。1・2年生では「農」を中心に勉強し、グループワークでも農家の暮らしから見えてきた新しい暦「農マイライフ」を制作。しかし、ふと立ち止まると将来、農家になりたいわけじゃない自分に気づき、本当にやりたいことと真剣に向き合うようになる。

農家の暮らしには「旧暦」が密接に関わっていることに気がつき、旧暦を研究しながら、「針江のんきいふぁーむ」の一年を書き起こした「来暦」と、「旧暦」と「新暦」を掛け合わせた新しい暦「農マイライフ」を作成。

2年

“そこにしかないもの”を体感する旅プランを提案

共創型インターンシップは、「農業」と「農」の違いを教えてくれた「針江のんきいふぁーむ」へ。イノベーション企画に取り組む課題では、農家のライフスタイルの持続可能性に着目し、これからのライフスタイルのあり方と、それを伝える手段として「のんきじかん」と題した旅行プランを企画。「針江のんきいふぁーむ」が管理する一棟貸の古民家を活用し、ゲストに宿泊プランを体感してもらう。

3年

共創型インターンシップ先で取り組むイノベーション企画課題で制作した線の提案(のんきじかん)、米農家(米果)、針江(地域)、農水(環境)、ゆず(姿・季節)をキーワードにした提案を通して、手仕事を大事にしたり、自然のリズムに沿った生き方をすることは、実はあわただしいということに気づく。

4年

「農マイライフ」、「のんきじかん」の制作・企画を経てたどり着いた、卒業制作「てんてこのんき」。「てんてこのんき」を定義化するなかで茶道の精神性に通ずるものがあると感じ、野外でお茶を点てて楽しむ野点(のだて)にヒントを得て、「野良点(のらだて)」という独自のお茶の楽しみ方を提案。「客人が主人になる」をテーマに、茶碗を選ぶ、湧き水を汲むなど、お茶を飲むまでのさまざまな体験を通して、「あわただしいけれど、心はのんき」という精神を伝える場になった。

大分の地域に根ざしたデザイン事務所でグラフィックデザイナーに

4年生からオンラインでアルバイトをしていた、社会課題にも取り組む、地域に根ざしたデザイン事務所に内定。さまざまな経験を積み、地域で活躍するデザイナーになって独立するのが目標。「デザイナーになっても、農家の精神性はずっと忘れずにやっていきたいです」

「あわただしいけれど、心はのんき」という精神

卒業制作では、インターンシップで企画した「のんきじかん」の課題から、「あわただしいけれど、心はのんき」という精神を農的暮らしから見出し、「てんてこのんき」という造語を生み出す。自分の周りのことを自分の手で行う暮らしはあわただしいけれど、心はいつものんきである、そんな生活にこそ生きる感触があることを、「農」を学び続けた集大成として定義した。

将来

わたしが成長した、地域実践領域の4年間

こども福祉×地域

平良 珠朱

（沖縄県立開邦高等学校卒業）

Q. 高校生のときはどんな生徒でしたか?
美術科のある高校に進学し、油絵やデッサンなどを中心に学んでいました。地域の文化にも興味があり、個人の研究として、なぜ沖縄のお墓が他県とは異なるお家のような形になったのかについて調べていました。

Q. 地域実践領域を選んだ理由は?
歴史が好きで、なかでも滋賀県出身の石田三成が好きなのですが、石田三成を感じられる場所へ行きたいと思い、調べていたら成安造形大学に辿り着きました。調べていくうちに地域と美術が学べる地域実践領域があることを知り、私にぴったりだと思い選びました。

Q. 授業の中で大変だったことは?
1・2年生はグループワークが中心なのですが、コロナ禍ということもあり、お互いにどんな人なのかが分からない状況で、一つのものをつくりあげていく大変さを感じました。進めていく中で、意見が違うからこそできるものがあることを実感できたのは楽しかったです。

Q. 地域実践領域の魅力は?
考えるだけじゃなくて、実際に行って、会って、話してというリアルな体験ができるところです。先生、同級生、地域で出会う人それぞれからの刺激があって、たくさん影響を受けました。簡単に情報を得られる時代だけれど、実体験で触れて感じることが成長につながる大きな要因だと実感しています。

Q. 一番成長できたと思う部分は?
自分の意思をないがしろにしないというところです。自分が本当に何をやりたいのか、どういう社会になってほしいのかを考えるようになりました。きっかけは、インターンシップでお世話になった「能美舎」という出版社を運営されている堀江さんの言葉や、働き方に触れたことです。自分の判断基準を持ち、意思を表明することで、自然とやりたいことが近づいてくると教えてもらいました。

4年間の 実践と成長

グループワークで意見がまとまらず…。

滋賀県の水口地区のフィールドワークでは、地域に根付いているところを見つけて調べ、グループワークで発表する課題に挑戦。しかし、グループ間での意見のすり合わせがうまくいかず、それぞれが違う内容をまとめて発表することに…。地域の情報のつかみ方は学ぶことができたが、課題が残るグループワークに。

1

一つの作品をグループワークで完成させる

「地域の素材でつくる」という授業のグループワークで、長浜市集福寺地区のフィールドワークから、地図とワークシートを制作。布にシルクスクリーンで地図を刷り、集福寺地区の森の草木で染めた糸で植物の刺繍をすることで、自分たちが見つけた森の色を表現。メンバー全員で何度も話し合いを重ね、一つのものをつくりあげることを達成した。

2年

「地域の素材でつくる」という授業のグループワークで完成させた、長浜市集福寺地区の森の地図。クリガ、栗、ソヨゴ、ススキ、セイタカアワダチソウなどの植物を用い、灰媒染という染め方で刺繍糸の染色に挑戦した。

2

1年

地域のお土産を開発する課題でつくった「ウシオーラセー」。地元沖縄には闘鶏の様子を表現した張子のおもちゃ「タウチーオーラセー」があり、それをヒントに地元で有名な闘牛をかわいく表現した。

生きる方向性を見つけたインターンシップ

ある福祉イベントで「能美舎」という出版社を営む堀江さんに出会い、「インターンシップはここしかない」と決心!
大手新聞社で記者をしていた経験を活かし、その土地で暮らしながら、やりたいことを地域社会の活動につなげている堀江さんの姿に感銘を受ける。地域の人と関わりながら、自分の思いや考えを伝える仕事がしたいと強く思うようになる。

3

3年

共創型インターンシップのイノベーション企画で制作した小さなパンフレット「能美舎日誌」。「能美舎」が発行している本の紹介だけでなく、「能美舎」がどんな出版社なのか、堀江さんがどんな働き方をしているかを平良さんの目線で紹介している。

本を入り口にした地域の居場所をカタチに

3年生から授業とは別のインターンシップでお世話になっている、大津市の瀬田北エリアで子どもたちの居場所事業を運営する「NPO法人寺子屋共育舘」で卒業制作に取り組む。本を入り口に、ふらっと立ち寄って本を読みながらのんびり過ごすことができ、困ったときは相談ができる人がいる、「まちか堂」という小さなまちの図書室を提案。実際に運営も行っている。

4

4年

卒業研究では、「まちの図書室 まちか堂(瀬田北地区)プロジェクト」を発表。孤独・孤立問題の解決方法の一つに、地域や人と人とのつながりを用いて人を元気にする仕組み「社会的処方」という対応があることを知り、地域の人が誰でも気軽に足を運べ、困ったときは話ができる図書室が生まれた。

滋賀で子どもたちの居場所事業を行うNPOで地域に根付いた福祉活動を

インターンシップをきっかけに、孤独を感じている子どもたちと関わり続けたいという思いになり、卒業制作でお世話になったNPOに就職。
学童に勤務しながら、「まちか堂」の運営を続けていく。

将来

わたしが成長した、地域実践領域の4年間

パン職人×地域

假名 星那

（滋賀県立八幡高等学校卒業）

Q. 高校生のときはどんな生徒でしたか?
小学１年生から続けていたダンスに夢中でした。高校は普通科でしたが、母がトールペイントの先生をやっていた影響で絵やグラフィックデザインに興味を持つようになり、画塾に通っていました。

Q. 地域実践領域を選んだ理由は?
グラフィックデザインを勉強したいと思い、情報デザイン領域に入学したのですが、パソコンに向かってつくることが苦手ということに気づいて…。授業で一緒だった地域実践領域の同級生や先生に話を聞き、２年生で転領域をしました。

Q. 授業の中で大変だったことは?
私は興味を持つと体が先に動いてしまうタイプで、いろんな人に話を聞いて情報収集をするのですが、膨大な情報の中からどこを要点にしたら伝わるのかを考えるのが大変でした。でも、他の学生の伝え方を参考にすることで少しずつ克服できました。

Q. 地域実践領域の魅力は?
地域実践領域で一番感じたのは、結局は「人」だということ。初対面の人と話すことが苦手だった私を、先生や同級生、地域で出会った人たちが変えてくれました。場をつくっているのも人、人に影響されるし、人に感動させられるし。それを実感できる領域だと思います。

Q. 一番成長できたと思う部分は?
興味を持つ幅が増えたことです。以前はスルーしていたことに、自然と足が止まるようになりました。好奇心の赴くままに、どんな場所でも飛び込んでいけるようになったからこそ、「パンづくり」という、自分がやりたいことを見つけられたと思います。

4年間の 実践と成長

地域への興味が深まり転領域を決意!

情報デザイン領域に入学。パソコンを使う授業が多いなか、パソコンに向かって作業をすることが苦手なことに気づき、同じ授業を受けていた地域実践領域の同級生と話したのをきっかけに、地域実践領域の加藤先生に話を聞きに行く。フィールドワークをしながら研究に落とし込んでいく授業に心が動き、転領域を決断。

地域のお土産を開発する課題で作った「タイムスリップ行李」。近江商人が私物を入れるものとして欠かせなかった行李を、近江八幡の素材を用い、歴史や文化を受け継ぎ新しい価値を持つものとして制作。

人と話すことで新しい自分に出会う

地域をフィールドにこれまでとは違う授業を受ける日々。初対面の人と話すのが苦手でも、地域実践領域の同級生のウェルカムな空気感と、フィールドワークで同じ体験をするなかで自然と会話ができるようになる。地域の中で出会う人にも自ら話しかけられるようになり、一緒に学ぶ学生たちに刺激を受けながら自分の成長を実感する。

卒業研究では、「パンと陶のあれこれ 記録―私の故郷から掘り起こすパンと文化の物語―」というタイトルで、近江八幡の伝統野菜「北之庄菜（きたのしょうな）」に光を当て、故郷・近江八幡から生まれ根付いた食の伝統文化と歴史の物語をヒントに、パンを楽しむ暮らしのひとときを提案。「北之庄菜」を使ったパンを完成させた。

名古屋にあるパン職人とバリスタのいるベーカリーに内定

パン職人として修業を積み、いつか地元の近江八幡で自分の店を持つのが目標。「食材の歴史や地域文化を大切にしたパンをつくって届けたいです」

心の礎となるパンと出会う

パン屋でのバイトをもう1軒増やす。2軒目のパン屋では、歴史や文化を紐解くところからパンづくりが始まり、パンづくりに対する姿勢や美味しいものの基準など、今までのパンの概念が180度ひっくり返る。パンの知識を深めるため、名古屋で行列が絶えないコーヒーとパンの店『KISO』にインターンシップを直談判し実現する。

1年生の課題で制作した切手のデザイン。自然界にある植物をモチーフに、統一性を持つ幾何学模様を用いて新たな植物の表現を提案した作品。

憧れのパン屋でバイトをスタート

高校生の頃からパンが好きで、つくる方にも興味が! パンへの熱量は日に日に膨らみ、実家の近くのパン屋でバイトを始める。朝4時から仕込みをすることも苦にならず、ますますパンに夢中。フィールドワークで鍛えたフットワークはパン屋巡りにも活かされ、東京まで遠征へ。両手いっぱいにパンの袋を抱えて新幹線に飛び乗る。

共創型インターンシップでは、近江八幡にあるパン店「ブーランジェ パンスタンダード」へ。「土地から生まれるパン文化」をテーマに、試行錯誤しながら旬の食材を使ったパンづくりに挑戦。パンを通してお客さんと四季の楽しみを共有することを実践した。

わたしが成長した、地域実践領域の4年間

地産地消×暮らし

高木 龍樹

（奈良県立高円高等学校卒業）

Q. 高校生のときはどんな生徒でしたか?
もともと絵を描くことが好きで美術科のある高校に進学。デッサンを中心に日本画や洋画の基礎知識を学んでいました。学校へは奈良駅の近くの東向商店街や、もちいどのセンター街を通って通学していたので、高校生の頃から商店街が好きでした。

Q. 地域実践領域を選んだ理由は?
祖母が働いていた大津市のグループホームに、成安の学生がボランティアで来ていたのがきっかけで、祖母に「いい大学がある」と教えてもらいオープンキャンパスへ。そこで地域実践領域を知り、フィールドワークを中心にした授業内容に魅力を感じ、進学を決めました。

Q. 授業の中で大変だったことは?
入学当初はパソコンに慣れておらず、資料づくりに苦戦しました。人前で話すことも苦手だったので、合評のたびにどうやったら最後まで詰まずに聞いてもらえるかをグループで話し合っていました。その甲斐あって、同級生との関係を深めることができたと思います。

Q. 地域実践領域の魅力は?
同学年の関係性がすごく魅力的で、全員と仲がいいところです。先生や助手さんとも話しやすく、授業外でも相談しやすいので資料づくりなどで悩んだときも前に進むことができました。助手さんが授業内容をわかりやすく説明してくれたり、学生が思っていることを先生に伝えてくれるところも、安心して学べる要因として大きいと思います。

Q. 一番成長できたと思う部分は?
人前で発表をすることが苦手でしたが、今は自分の言葉で話せるようになり、作品への想いを伝えられるようになりました。成長できたのはグループワークをするなかで、メンバーで不安を共有したり、お互いにできないことを補いあったり、一緒に学んだみんなのおかげだと思います。

4年間の 実践と成長

「針江のんきぃふぁーむ」でのフィールドワークで目に止まった雑草を、美味しく消費するものとしてリゾットを提案。同じグループだった中国出身の留学生は野草に詳しく、アドバイスをもらいながら野草を選定した。

パソコン作業に振り回される

高校では絵を描いていたので、パソコンの技術は一から勉強。資料づくりに時間がかかり、パソコンに振り回される日々。グループワークでは意見がぶつかり苦戦することも。それでもフィールドワークは楽しく、中でも琵琶湖の漁師さんに湖水が表層から底層まで循環する「全層循環」の話を教えてもらい、滋賀の自然に魅了されていく。

邪魔もの扱いされる雑草を美味しく活用

2年生は「見つける力」と「つくる力」の両方が求められる課題に挑戦。有機農業をされている「針江のんきぃふぁーむ」でのフィールドワークでは、畑に生えている雑草を何か有効的に活用できないかと思い、野草の本を片手に食べられるものを選定。酸っぱい、香り高いなどさまざまな野草を組み合わせてリゾットにし、美味しく食べる方法を試みる。

地域のお土産を開発する課題では、奈良県五條市の名産品の柿のジャムや、柿の葉の粉末を生地に練り込み、柿のジャムを上にのせたクッキーをつくる。奈良らしさを大切に、美味しくて栄養価も高いお土産が完成した。

自然×美術のイノベーション事業を提案

共創型インターンシップは琵琶湖で水上アクティビティ・自然体験・学習施設を運営する「オーバルオブテックス株式会社」へ。カヌースクールに参加する子どもたちに向けて、たどり着いた浜で拾ったものを観察してワークシートに書き出してもらい、みんなで一つの宝の地図をつくるワークショップを実践。子どもたちに自然を通して、創造することの楽しさを伝える提案になった。

共創型インターンシップのイノベーション企画として、「琵琶湖の宝もの探し」ワークショップを実施。カヌースクールの子どもたちにとって、見つける力や考える力、共有する能力といった非認知能力の向上につながる提案にもなった。

日本の風景や文化を独自の視点で研究

卒業制作では、「ぼくの日本遺産」というテーマで、大好きな商店街を軸にしながら、大津ナカマチ商店街、岐阜柳ヶ瀬商店街など、日本から無くなってほしくない風景や文化を「観光とその裏側の生活」をテーマに写真と文章で紹介。制作したオリジナルキャラクター「怪盗キジトラ」は、研究者としての解説に加え、第三者の意見を述べるキャラクターの役割も担う。

卒業制作展では、1冊のノートにまとめた「ぼくの日本遺産」の他に、紹介している場所で見つけたパンフレットや、撮影した写真なども展示。旅の案内人として登場する「怪盗キジトラ」のパネルも制作した。

スーパーマーケットのバイヤーとして奈良の魅力をお客さまにお届け

“地域に根ざした会社”を軸に就職活動をし、地場産物を中心に新鮮な生鮮食品をお客さまへ丁寧に届けるスーパーマーケットに内定。バイヤーになってあまり流通していない奈良県の魅力的な野菜や果物を掘り起こし、奈良をもっと好きになってもらうことが目標。

地域実践領域カリキュラム

滋賀県の環境と特質を活かした、独自のアクティブラーニング

この領域は、地域というフィールドを最大限に活かし、楽しみながらアクティブに活動することが基本です。PBL（プロジェクト等に基づく実践学習）を通し、デザインや美術を専攻する他の領域の学生たちと交わることによって、クリエイティブな感性や発想力を獲得。同時に滋賀県内で活躍する招聘教員や、キャリアサポート担当教員との関わりの中で、長期にわたる就業実践を体験します。

体験・動く

1年次 | 地域を観察する

地域実践基礎演習

〈前期〉地域の特徴や社会環境を理解する

自己のことを他者に伝える、また地域（農村と市街地）を知るフィールドワークを通して、自らの視点で他者のことを伝える効果的な説明方法（プレゼンテーション）を学びます。

〈後期〉フィールドワークの成果をプレゼンテーションする

「まちづくり」の観点から調査したい地域を選択し、これまでのフィールドワークの手順や思考方法を活かし、自らの視点や観点で気付いた魅力をプレゼンテーションします。

2年次 | 地域を分析する

地域実践演習

〈前期〉地域の素材でつくるサスティナブルデザイン

一次産業をはじめとした地域企業と連携し、社会の流通や価値について理解し、近江（滋賀県）の魅力と特徴から発想するお土産の開発をします。地域の素材やメッセージを意識化し、食に焦点を当てた成果物をつくり、制作から発表まで取り組みます。

〈後期〉自然の素材から一次産業のしくみを理解する

地域の素材を使い、住空間やインスタレーション制作に取り組みます。様々な人との関係から共有された目標をもとに、琵琶湖岸の自然環境に焦点を当て、「琵琶湖の素材」で表現します。サスティナブルなデザイン原理から、形や機能だけでなく、人々との関係もデザインすることを学びます。

3年次 | 地域の中で活動する

共創型インターンシップ

〈前期〉地域と共創しながら長期に渡り現場で仕事

大学の外で何を目標として、何を学ぶのかという計画を立て、そこから興味関心の高い人物（パイオニア）やインターンシップ先について自分の考えをまとめます。現場での長期の仕事を通じて、合理性と非合理性の両方を掴み、自分の研究テーマの軸を確立することを目指します。

〈後期〉実社会でイノベーション事業に挑戦

就業体験に関わる人々と対話しながら条件に合わせたイノベーション事業を企画、実践し、研究テーマの構築を目指します。経験や得られた成果をまとめ、4年次以降の研究テーマの方向性に適した資料や記録を作成します。

※詳しくはP10-11へ

4年次 | 地域の中で創造する

卒業研究

〈前期〉自ら研究テーマを設定し、主体的に探求

自ら研究テーマを設定し、これまで修得した方法論を通じて主体的に探求します。研究とは主観的な興味関心を越え、社会的意義、専門領域の分野的意義を客観的に持つことが重要です。これまでの専門的な学びの集大成として、各自研究テーマの検討、研究対象の発見、調査を行い、その成果発表に向けた制作・企画・計画などを通じた実践的な研究を行います。

〈後期〉専門性に応じた質の高い研究成果を発表

前期で設定した研究テーマと成果をさらに展開し、最終的に専門性に応じた質の高い研究成果を「研究フォーラム」「卒業研究・制作」として発表します。

1.研究フォーラム

3年次の長期インターンシップで出会った地域のキーパーソンとの対話から、自身の研究テーマを深めていきます。

2.卒業研究・制作

3年次より目標においてきた研究テーマと研究フィールドの決定をし、成果物の制作を行います。

※詳しくはP12へ

理論・考える

1年次

地域実践学入門

〈前期〉現代社会の問題を考える

地域実践の導入として、現代社会の問題を考えながら、地域へフィールドワークに出る準備をします。自身の考えを文章化し、データから統計、図やグラフ化するための基本的なスキルを身につけます。

〈後期〉地域を立体的、動態的に観察する方法を学ぶ

言葉や行動のような数値化しにくい質的なデータを用いて探求する民俗学の手法で地域を観察し、絵・文字・写真で記録。情報を整理し、人々の行動や自然との関わり方について読み取る力を養います。

2年次

地域実践学（調査・分析）

〈前期〉多種多様なデータと分析、可視化の方法を学ぶ

地域に関する多様性を認識し、調査・収集手法、読解、分析、可視化のスキルを学びます。これらの手法を実践的にフィールドワークに応用し、客観的な視点から地域をより深く理解します。

〈後期〉地域の観察から問題を発見し理解する

地域の観察から問題を発見し、トータルに理解するシステム思考法を学び、地域に現れるパターンを読み取ることから、地域を構成する様々な事柄の関係性を理解する能力を養います。

3年次

地域実践学（企画・発信）

〈前期〉ソーシャルビジネスの理論と実践

社会問題の解決を目的としたソーシャルビジネスに必要なスキルを身につけます。ビジネスプランのデザイン基礎を学ぶために、身近な地域の社会的問題を、システム思考を用いて図示化し、アイデアを生み出します。実践に必要な資質を磨くために、個人ワークとグループワークを組み合わせて進めます。

〈後期〉ライフデザインと研究計画の策定

ウェルビーイング（個人が心身ともに満たされた状態）に焦点を当て、地域に密着したライフデザインを調査します。未来社会を想像するために、新しい活動を行っている人々をゲストに招き、真の豊かさや生き方のロールモデルを学びながら、自らのライフデザインについて深く考えていきます。

芸術の素養を磨く［学部共通科目］

プロジェクト科目

アートやデザイン、表現の可能性を社会で実践する

アートやデザインと社会の関わりを、実践を通して経験できるプロジェクト科目では、自治体や地域社会との連携、地域文化や観光への取り組みといった地域創生プロジェクトも充実しています。専門領域の垣根を越えた交流と社会実践の中で多様な視点を身に付けながら、地域とアート、表現の可能性を探求できます。

ビワイチプラス
地元企業と行政と連携し、琵琶湖一周サイクリング「ビワイチ」の新たな可能性を探る。

近江里山フィールドワーク
農作業や環境整備を通じて、人と自然の関りや理解を深める。

ちま吉広報・グッズ開発
地元に根ざしたキャラクターを活用したイベント企画や広報、グッズ開発。

ソーシャルデザイン
自治体、行政と連携し社会課題の解決に創造的な方法で挑戦する。

地域とアート
地域の特性を活かしたアートプロジェクトの企画と開催。

基礎科目

創造表現の土台づくりと芸大生ならではの思考力と協働力を身につける

1年次は経験の差に関わらず、表現することの面白さを体験し、意欲を持って芸術を学べるよう、しっかりと基礎学習を行います。一方で芸大生ならではの思考力や産官学民連携プロジェクトに取り組むための協働力を養う授業も行います。

※詳しくは大学案内P12-13の「専門性を確立する学び」をご覧ください。

芸術応用科目	各専門領域理論、図法・色彩等の演習、美術史、芸術鑑賞、美術教育 等	広範な芸術活動を理論的、実践的に支え、知識・技能を養う科目
教養科目	社会学、自然科学、哲学、美学、宗教学、考古学、心理学 等	それぞれの研究内容や志向に有益な学問を学べる科目
キャリアデザイン科目	ポートフォリオ作成、自己分析、インターンシップ 等	進路実現に必要な情報や知識を学び、キャリア形成をサポートする科目

大学と企業が一緒につくる共創型インターンシップ

長期にわたる企業との共創型インターンシップ

地域実践領域では、地域の様々な企業と連携し、3年次に独自のインターンシップに取り組みます。このインターンシップは、1年間のうち約4ヶ月間という長期間にわたって、実際の現場で仕事をします。地域の魅力や独自性を活かした仕事、高齢社会を想定した仕事、持続可能な社会における仕事など、未来社会を指標においたイノベーション事業を企業と共に取り組む実践型授業です。

※学年、役職等は取材時のものです。

ここが違う！地域実践インターンシップ

他大学にもある従来型の一般的なインターンシップ

- 4日間から1週間程度の短期間
- 短時間で可能な就業体験
- 就業意識のアップや、社会生活を身近に体験

→

地域実践インターンシップ

- 約4ヶ月間にわたる長期インターンシップ
- 長期間だからこそイノベーション事業に携われる
- 就業体験を通じて自分らしい研究のあり方を追求できる

ゆっくり深める
様々な仕事を経験しながら仕事の本質をつかみます。

じっくり関わる
様々な人たちと関係性をつくり共創する喜びをつかみます。

しっかり働く
様々な経験や関係性が自信となり自分の仕事をつかみます。

専門科目として行われるインターンシップの流れ

1年　2年　3年　4年

準備・マッチング	事前指導	インターンシップ前期	インターンシップ後期	事後指導	発展・研究
地域実践学・演習	地域実践演習5	地域実践演習6	地域実践演習7	地域実践演習8	卒業研究
	4月 5月	6月 7月 8月	9月 10月 11月	12月 1月	

インターンシップ期間の1週間の流れ

月	火	水	木	金	土	日
	面談日			インターンシップ	インターンシップ	
学内通常授業	学内	学内通常授業	学内通常授業	学外	学外	休み

週1回は教員と面談。独自に開発された実習ノートのチェックなど

実際に週2日間程度、学外に出て企業で実習

インターンシップ・実習の現場（施設）

インターンシップ・実習の現場として、株式会社たねや、オーバルオプテックス株式会社、有限会社ブルーベリーフィールズ紀伊國屋、琵琶湖汽船株式会社、総本山三井寺、彦根仏壇「株式会社井上」、冨田酒造有限会社、「わさいな仰木」仰木地区活性化委員会、株式会社まちづくり大津、まちづくり会社まっせ、針江のんきぃふぁーむなど招聘教員が所属する企業や団体等を想定しています。

マップ形式のショップリーフレット「滋賀びいきまっぷ」を作成

清水あかり（地域実践領域３年）

Q1. インターンシップ先は?
滋賀県立美術館の中にあるミュージアムショップ＆カフェ「Kolmio in the museum（コルミオ イン ザ ミュージアム）」です。

Q2. インターンシップ先を選んだ理由は?
私は幼い頃から自分が「いいな」と感じたことを誰かに伝えることが好きでした。「Kolmio in the museum」は、展覧会関連グッズの他に滋賀の特産品やプロダクトをセレクトし、滋賀の魅力発信もされているという取り組みに興味を持ち選びました。

Q3. イノベーション企画での取り組み／制作したものは?
「Kolmio in the museum」で販売されている滋賀の特産品やプロダクトが、滋賀県内のどこで作られているかが一目でわかるマップ形式のショップリーフレットを作成しました。現在は美術館での正式配布に向けて、準備を進めています。

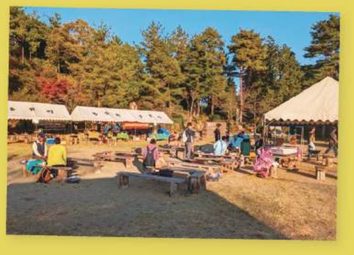
Q4. 取り組み／制作するなかで大変だったことは?
これまでは100%自分がつくりたいものをつくってきましたが、今回はショップから提示された条件など、ある種の「制約」がある中での制作でした。その制約の中で自分がつくりたいイメージとすり合わせていくのが大変だったことでもあり、楽しかったことでもあります。

Q5. インターンシップを経て、成長できたと思うことは?
インターンシップを振り返ってみると、自分の苦手なことやできないこと、直したいところを再確認するシーンが多かったです。それは辛い作業ではあったけれど、自分の未熟さを認めて、誰かに助けてもらう選択ができたことは、またひとつ成長できた部分ではないかと思います。

Kolmio in the museum
滋賀県立美術館のエントランスにあるショップ&カフェ。所蔵する作品の関連商品や、滋賀ならではの商品などをたくさん揃えている。カフェでは季節感ある軽食が楽しめるのも魅力。

美術館と地域をつなぐことに興味関心を持っていることをうれしく思います。何でも関心を示す清水さんの柔軟さと、それを何らかの形に起こそうとする態度は素敵です。

湖の国のかたち運営代表・Kolmio オーナー 市田恭子さん



山の存在意義を周知させるバーベキュープレート×ガイドマップ

山川慶真（地域実践領域３年）

Q1. インターンシップ先は?
A. 私は滋賀県犬上郡多賀町をフィールドに、大滝山林組合（高取山ふれあい公園）、多賀森林循環事業共同組合、おおたき里づくりネットワーク、（一社）地域再生プロジェクトみなおしの計４団体へ赴きました。

Q2. インターンシップ先を選んだ理由は?
A. 木材をはじめとする山間資源の有効活用と、山間部を取り巻く社会のあり方を学ぶために選びました。

Q3. イノベーション企画での取り組み／制作したものは?
A. 多くの人に山の存在意義を周知させ、興味関心を持たせるために、高取山ふれあい公園で開催される「全国バーベキュー文化祭」で使う木製のバーベキュープレートと、園内の山間事業や施設をイラストでサイン化し、表記したガイドマップを掛け合わせた“バーベキュープレートマップ”を発案しました。

Q4. 取り組み／制作するなかで大変だったことは?
A. 木材を扱うには時間や費用をかけ、いくつかの過程や条件を踏まえる必要があるため、制作時は常に難航を強いられましたが、今回の経験を次の制作の糧にしたいと思いました。

Q5. インターンシップを経て、成長できたと思うことは?
A. 山間部では、一人ひとりの能力を連携させないと立ち向かえない深刻な課題が多いと実感しました。今後、私自身が対象となる地域で何か実践する際、一人ひとりの存在を大事にしたコミュニティを創りたいと思うようになりました。

大滝山林組合
山づくりの担い手として明治26年に設立。井伊藩の所有林を引き継いだ行政組織、一部事務組合。多賀町の大滝地区に2400ヘクタールの所有林があり、地域の人に一部貸付をしながら山の管理を行っている。

山川さんのチャレンジとして流木の利活用をきっかけに、林業の現状とそれを生業としてきた地域課題まで興味関心を広げられたことは大事なことだと思います。

大滝山林組合 職員 田中一則さん

飼い主もわんちゃんもうれしい「わんちゃんランチ」

LUO JIANAN（地域実践領域３年）

Q1.インターンシップ先は?
有限会社ブルーベリーフィールズ紀伊國屋が運営する、「安曇川泰山寺 ソラノネKINOKUNIYA」です。

Q2.インターンシップ先を選んだ理由は?
「安曇川泰山寺 ソラノネKINOKUNIYA」は、食堂やブルーベリー農園を運営されているとインターネットで知りました。私は食に興味があったので、食堂で提供されているメニューにはない、発酵の技術を活かした新しいメニューをつくることができるかもしれないと思い選びました。

Q3.イノベーション企画での取り組み／制作したものは?
食堂にはわんちゃん連れのお客さんが多いことに気づきました。そこで、人もわんちゃんもうれしくなるメニューを提供したいと思い、「わんちゃんランチ」をつくりました。

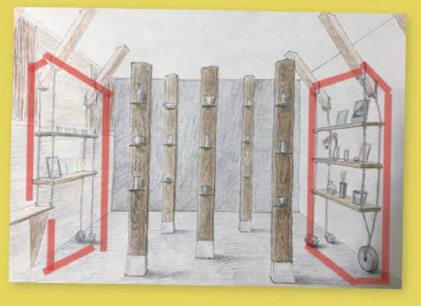
Q4.取り組み／制作するなかで大変だったことは?
提案したわんちゃんランチは量が多く、食べさせたくても小型犬だと無駄になるという声をいただきました。いろんな大きさのわんちゃんに対応できるよう、量を減らして適正な価格を設定する工夫ができれば、飼い主さんが注文しやすいと完成後に気づきました。

Q5.インターンシップを経て、成長できたと思うことは?
これから自分が研究したいテーマがより明確になりました。結婚する人、結婚しない人、ペットと暮らす人など、幸せの形や生き方はさまざまです。人の暮らしと切り離せない食生活をテーマに、多様化するライフスタイルと結付けながら研究を深めたいと考えています。

ブルーベリーフィールズ紀伊國屋
琵琶湖を見下ろす山の中腹で、ブルーベリーやハーブなどを育てるオーガニック農園。ジャムや焼き菓子などを販売のほか、滋賀県高島市で自然食農家レストラン「ソラノネ食堂」を営む。

LUOさんの食から生活スタイルへの関心は、これからの暮らし方を問う糸口になっていると思います。心と体、食を通して「人間の本当の豊かさとは何か」を問い続けてほしいです。

ブルーベリーフィールズ紀伊國屋 会長 岩田康子さん



古材、骨董品を活かして新たな価値を生み出す

中坪優太（地域実践領域３年）

Q1. インターンシップ先は?
古民家移築再生や古材販売を手がける、明治35年創業の島村葭商店です。

Q2. インターンシップ先を選んだ理由は?
私の研究、制作活動ではモノづくり、アップサイクルを軸に行ってきました。古材にも共通点があり、必要としない人や価値を見出せない人からすると古びた廃材でしかありませんが、古材の知識がある人や価値を見出せる人が見ると貴重な素材です。そこで古民家移築再生や古材の取り扱いを行っている島村葭商店さんを紹介していただきお世話になりました。

Q3. イノベーション企画での取り組み／制作したものは?
島村葭商店が営む「喫茶 古良慕（こらぼ）」のギャラリースペースの空間構成を手がけました。ギャラリースペースは主に作家さんが個展を開く時に稼働し、それ以外の日は古材を販売する空間になっていました。私は島村葭商店の古材、骨董品を活かした新たな価値を付けることができる展示空間をつくりました。

Q4. 取り組み／制作するなかで大変だったことは?
自分の想像や描いた通りには進まないことが多く大変でした。妥協した点も多く、妥協する中でも最善を尽くせるように努力しました。

Q5. インターンシップを経て、成長できたと思うことは?
普段では触れる機会が少ない古材を磨いたり、加工する作業を手伝わせていただき、イノベーション企画では自分のアイデアを元に古材に手を加え制作を行いました。この貴重な経験のおかげで、素材の知識やモノづくりの引き出しを増やすことができました。

島村葭商店
明治35年創業。琵琶湖に群生する葭を屋根資材や簾として販売する葭商の生業にはじまり、現在は、日本の建築を古民家移築再生、古材販売の分野から40年以上支え続けている。

中坪さんのセンスとこだわりを大事にして欲しいです。素材や歴史を深く知るだけではダメで、常に何事にも興味関心を持つこと、そこから新鮮な何かが生まれると信じています。

島村葭商店代表・喫茶古良慕店主 島村義典さん

●卒業研究

研究フォーラム

3年次の共創型インターンシップで出会った地域のキーパーソンとの対話から、自身の研究テーマを深めていきます。様々な人と出会い、関係性が生まれ、地域や社会からの気づきを得ることで自分自身の興味関心や研究テーマをより明確にできます。

4年次において研究テーマを進める過程で、自身の思いや考え方を話してみる。あるいはその課題と向き合っている人と対話をすることが大切です。そしてそのテーマを共有し、新たな問いを見つけ出していく時間をつくっています。

「ぼくのわたしたちの日本遺産」

――ぼくの日本遺産を通し、魅力を探る。―― 高木龍樹

卒業研究では、長く続く商店街のような場所にある特有の雰囲気やにおい、生活感に魅力を感じ、「ぼくの日本遺産」と呼んで、スクラップブックのように採集を行いました。自分の好きな風景を守り、人に伝えていくにはどうすればいいのか。日々の営みや雑音のような暮らしの痕跡を集めながら、次第に自分にとって、自分以外の人にとっての視点について考えるようになりました。フォーラムでは、一人ひとりにとっての「ぼくの日本遺産」についてどう思うか話し合い、参加者と共に行った大津市中心市街地のナカマチ商店街でのフィールドワークやマップの制作について紹介しました。

パンと隣のあれこれ記録

――私の故郷から掘り起こすパンと文化の物語 ―― 假名星那

故郷である近江八幡市に根付く食文化の歴史を辿りながら、その過程で生まれる物語を探究し、パンと共に楽しむかたちで日常の食卓に取り入れる研究をしています。研究フォーラムでは、伝統野菜である「北之庄菜」というカブの成り立ちや、それに関わる人の物語を紹介し、参加者に「北之庄菜」を使ったシチューのパンを食べてもらいました。一度は栽培が途絶え、姿を消した「北之庄菜」。その物語を囲みながらみんなでパンを食べる機会は、つくる側、食べる側の立ち位置を想像しながら、可視化できない美味しさの秘密について考える時間をもつ場になったと感じています。

卒業研究・制作

3年次より目標においてきた研究テーマの構想（興味・関心、リアリティ、問題、表現など）と研究フィールド（場所、地域、分野、コミュニティ、つながり、グループなど）の決定をしていきます。その過程において、地域の方々と一緒にワークショップで取り組んだ成果物や、自身の生活を記録し編集したものなどをもとに、文章化やポスター制作を行います。併せて、研究を進める過程で出会う、様々なモノ、コト、先行研究、書籍、資料、図版なども一緒に収集し、卒業研究として展示、発表を行います。

まちか堂プロジェクト

――リンクワーカーとしてのまちの居場所研究―― 平良珠朱

子ども福祉のNPOにインターンとして関わったことから、子ども福祉の世界へ。関わるまでは知らなかった、子どもたちの抱える「しんどさ」を和らげるためにはどうするべきかを探ることから研究を始めました。現代社会の課題である「孤立」と「孤独」について社会的処方という方法を参考にしながら、自身が子どもたちと地域とをつなぐリンクワーカーとして、誰でも関われる余地のある私設図書室「まちか堂」を実際に運営しています。その中で子どもたちの「しんどさ」の原因を探りながら、「居場所」についての研究を進めていくのが、本研究の内容です。

「まちか堂」とは大津市の瀬田で活動している「NPO法人寺子屋共育轍」のみなさんと協力しながら、瀬田小学校・瀬田北中学校のある学区内で開いている小さな図書室です。私は人と地域資源とをつなげるリンクワーカーとして、ふらっと立ち寄ってのんびりしながら、話を聞いてくれる人がいる場所をつくり、少しでも「しんどさ」を減らせるようなマチのくつろげる場として役立てることを目指しています。

てんてこのんきのすすめ

――農的暮らしの学びから、来るべき生活のあり方へ。―― 佐々木良緒

今日の暮らしについて語る際に使われる「忙しい、農的生活、都会の生活、田舎の生活、自然と共存する暮らし…」などの言葉たちから一度離れて、私自身の暮らしのあり方を考えてみたいという思いから、「てんてこのんき」という言葉をつくりました。

「てんてこのんき」な暮らしとは、「自分ごと」の暮らしです。「太陽の恵み」を中心に生活をしている人は、人間だけでなく、自然も含まれた関係性の中で生活しています。身の回りに目を向け、自然との関係性の中で生活することで、目に見えない社会システムに頼る暮らしは「自分ごと」へ変化します。

それぞれが生きる社会生活の中で、未来のテクノロジーや技術を面白がり活用しながらも、目の前にある「太陽の恵み」を忘れることなく見つめること。そんな意識を常に持つことで、多様な暮らし方がある現代でも、「てんてこのんき」を実践できるのではないかと考えています。

地域実践領域から つながる仕事

地域を「考え」「動く」「創る」学びを通して成長していく4年間。その先には多種多様な仕事を選択できるあなたがいます。

伝統を受け継ぐしごと

現場での学びは、地域の伝統に触れる機会がたくさんあります。伝統工芸品のつくり手や、地産地消の生業に共感したあなたは、先人の思いを受け継ぐ担い手にふさわしい人材として、地域で活躍できるでしょう。

職種一例： 陶芸家、木工職人、仏壇・仏具職人、和ろうそく職人など

地域の生業を活かすしごと

地域を活性化するには、地域の情報を外へ発信していくことが必要です。例えば、伝統産業を別のモノと組み合わせてイノベーションすることで価値の転換が生まれ、販路の拡大に貢献することができます。

職種一例： 農林水産省、販売職、マーケティング、セールスマネージャー など

地域の諸問題に取り組むしごと

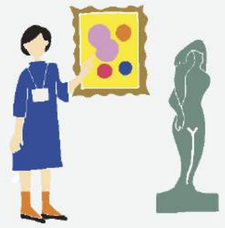
地域に根ざしたNPO、まちづくり会社職員、地域おこし協力隊など、地域の現場では新しい価値観で拠点をつくれる人や、地域との連携を企てる人が求められています。

職種一例： まちづくりのNPO職員、地域おこし協力隊 など

医療や福祉をサポートするしごと

医療や福祉の現場は、職員不足や少子高齢化など大きな課題を抱えています。医師や看護師、薬剤師、福祉施設職員と連携しながら、現場の情報を新しい価値観で社会へ発信できる人が求められています。

職種一例： 介護職員、ホームヘルパー、ソーシャルワーカー など



文化や芸術の企画を組み立てるしごと

芸大ならではのカリキュラムだからこそ、学芸員、アートのプランナー、コーディネイター、グラフィックデザイナーなどと連携するしごとにも就くことができます。

職種一例： 学芸員、アートディレクター、芸術・文化施設のスタッフ など

情報を整理し伝えるしごと

地域には魅力的な「コト」「モノ」が転がっています。その地域では当たり前でも、地域の潜在能力を物語れる人がいることで、外の社会で新しい価値として見出される可能性が生まれるのです。

職種一例： グラフィックデザイナー、編集者、ライター、新聞記者 など

地域の魅力を発信するしごと

独立したコミュニティデザイナーになり、例えば、特産品をブランディングしてマルシェを企画することもできます。地域の魅力発信に貢献するやりがいはひとしおです。

職種一例： コミュニティデザイナー など

公務員や公共分野の職員

地域の基盤は、住民と社会の連携から生まれます。公務員、教職員、商工会議所職員、地域コーディネイターなど、知識とコミュニケーション能力を活かしながら、地域住民と社会をつなぐ役割も担えます。

職種一例： 公務員、教職員、商工会議所職員、地域コーディネーター など

営業・企画営業のしごと

考え、動く、創ることは、営業や企画営業のしごとをするうえでの軸になります。「コト」「モノ」の価値をしっかりと捉え、新しい発想で、クライアントやエンドユーザーを楽しませる人になれます。

職種一例： 広告営業、メーカー営業、商社営業、代理店営業 など

一般企業の総合職

現場で様々な人とコミュニケーションをする経験から、社会への理解が深まります。4年間で培った多数の人と共に目標に向けて協力できる力は、信頼を持続できる人として評価され、一般企業でも活躍できます。

職種一例： 人事職員、総務職員、経理職員、法務職員 など

地域実践領域の就職・進路実績

（2022 ～ 2024年卒）

- ■㈱フジタ（印刷業／デザイナー職）
- ■KISO（小売業／製造職）
- ■星庭（デザイン業／デザイナー職）
- ■三恵観光㈱（レジャー・アミューズメント／サービス職）
- ■NPO法人寺小屋共育轍（NPO／サービス職）
- ■近江佛所（製造業／デザイナー職）
- ■㈱信興テクノミスト（情報サービス業／事務職）
- ■高島市立新旭北小学校（教育／教員）
- ■㈱平山（人材サービス／製造職）
- ■㈱いそかわ（小売業／総合職）
- ■滋賀県立大学大学院（進学）

※順不同

あなたの未来を変える!? 地域実践領域の教員

あなたの「学びたい」を育み、未来を彩る、個性豊かな教員を紹介します。

仁連孝昭 客員教授
NIREN Takaaki

滋賀県環境審議会会長、元滋賀県立大学副学長。社会システム研究家。地域と大学、環境と経済をつなぐ仕事に携わる。エコロジー経済学、環境と調和した経済発展について研究。2000年にNPO法人エコ村ネットワーキングを設立し、理事長に就任。環境分野、産業分野でも活躍している。また、近江八幡の「小舟木」エコ村の実現などに精力を注ぐ。2016年4月より本学の客員教授となり、新しい大学教育創造に意欲を燃やしている。

《学位》
大阪市立（現 公立）大学経済学部卒業
京都大学大学院経済学研究科修士課程修了（経済学修士）
京都大学大学院経済学研究科博士後期課程単位取得満期退学

泊 博雅 教授
TOMARI Hiromasa

メディアアーティスト。1984年に設立したアーティストグループのダムタイプ（dumb type）を活動の中心として、メディアアートを研究。コラボレーションによるクリエイティブのあり方を考える。現在、成安造形大学教授・副学長。主な活動に、『S/N』（1994年「アデレード・フェスティバル」ザ・スペース）、『MEMORANDUM OR VOYAGE』（2014年「東京アートミーティング：新たな系譜学をもとめて－ 跳躍／痕跡／身体」東京都現代美術館）他多数。

《学位》
京都市立芸術大学美術学部美術科構想設計専攻卒業（芸術学士）
京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻造形構想修了（芸術学修士）

加藤賢治 教授
KATO Kenji

宗教民俗研究者。滋賀県をフィールドとして、宗教民俗を研究。現代に受け継がれてきた地域の伝承や祭礼の意義を検証し、地域社会のあり方を考える。現在、成安造形大学教授・副学長、同大学キャンパスが美術館館長、附属近江学研究所副所長。主な論文に『宮座の祭礼』～今堅田に伝わる祭礼「野神祭り」に見られる現状～（2012年成安造形大学附属近江学研究所紀要1号）、『寄人衆の役割に見る五箇祭』～多様なコミュニティが結び、支える祭礼の一事例～（2017年成安造形大学附属近江学研究所紀要6号）他多数。

《学位》
立命館大学産業社会学部卒業（社会学士）
佛教大学大学院文学研究科仏教文化専攻修了（文学修士）
滋賀県立大学大学院人間文化学研究科地域文化学専攻博士後期課程単位取得満期退学

石川 亮 准教授
ISHIKAWA Ryo

美術家、アートディレクター。2015年よりビワバールまるごとブランディング事業に携わる。近年は国内の神仏にゆかりのある地に出向き、その場所の持つ性質やルーツを探ることが作品制作の糸口になっている。『自然学－来るべき美学のために－』（2012年滋賀県立近代美術館）、『SHIZENGAKU』（2013年「ロンドン大学ゴールドスミスカレッジ」）、『森のちから-森へ行こう－』（2014年「アーティスト・イン・レジデンス」和歌山県串本町潮岬）など、国内外での個展、グループ展多数。

《学位》
京都精華大学美術学部（現：芸術学部）造形学科卒業（芸術学士）

領域専門科目担当教員

田口真太郎 講師
TAGUCHI Shintaro

コミュニティデザイナー
《学位》
滋賀県立大学環境科学部卒業
滋賀県立大学大学院環境科学研究科修了（環境科学修士）

山田真実 助教
YAMADA Mami

美術家
《学位》
京都市立芸術大学美術学部美術科版画専攻卒業（芸術学士）
京都市立芸術大学大学院美術研究科絵画専攻版画修了（芸術学修士）

岩川貴志 非常勤講師
IWAKAWA Takashi

環境システム学研究者
《学位》
京都大学工学部卒業
京都大学大学院工学研究科修士課程修了（工学修士）
京都大学大学院工学研究科博士後期課程単位取得満期退学

地域実践領域の招聘教員

滋賀県の魅力を活かして活躍する人たちから学べます。

秋村 洋
AKIMURA Hiroshi

「株式会社プラネットリビング」代表取締役、「株式会社秋村組」代表取締役、「株式会社まちづくり大津」役員、「文化経済フォーラム滋賀」幹事、「オーガニックレストランなぎさWARMS」店主。「ひとも社会も健康であり続けるために－」をモットーに、生活の三大要素「衣食住」の食と住の分野から、健康的な暮らしのスタイルや持続可能な社会づくりを提案・考察する。

石津大輔
ISHIDU Daisuke

「針江のんきいふぁーむ」代表。2005年より実家である高島市針江地区「針江のんきいふぁーむ」で就農。3年目から、環境への負担を軽減するために実践していたお米の無化学肥料無農薬栽培・無化学肥料減農薬栽培を徹底している。販路開拓や講演活動などにも精力的に取り組んでいる。座右の銘は「軸足は清流に、片足は濁流に」。

井上昌一
INOUE Shoichi

「株式会社井上」代表取締役、「彦根仏壇事業協同組合」副理事長。近世以降、錺金具や、彫刻、金箔押しなど高度なセツの職（技術）によって支えられてきた仏壇づくり。彦根仏壇と呼ばれた貴重な地場産業を守るため、その技術を調度品や雑貨など、次世代に息づく新たなものづくりに活かすという挑戦に取り組んでいる。

岩田康子
IWATA Yasuko

「有限会社ブルーベリーフィールズ紀伊國屋」会長。無農薬野菜を中心としたオーガニックスタイルのレストランを経営。食の安心、安全を訴える。かまどで火をおこし、お米を炊いていただくという原点にこだわり、次世代に残すべき「食」のあり方を考える。

大西 巧
ONISHI Satoshi

「有限会社大與」代表取締役。滋賀県高島市で100余年にわたり伝統の和ろうそくをつくる専門店。和ろうそく「大與」四代目主人。2011年「お米のろうそく」でグッドデザイン賞を受賞。創業100周年を機に「灯と人を繋ぐ」コンセプトブランド・hitohito（ひとひと）を立ち上げ、暮らしの中の灯と人の関係や在り方を問い、発信している。

川戸良幸
KAWATO Yoshiyuki

「公益社団法人びわこビジターズビューロー」会長。琵琶湖とそれを取り囲む山々という素晴らしい自然景観を持つ滋賀県をこよなく愛し、琵琶湖を舞台とした未来の観光のあり方を常に考える。母なる琵琶湖に抱かれて学ぶ学生たちとの取り組みに大きな期待をよせる。

金 再奎
KIM Jaegyu

「滋賀県琵琶湖環境科学研究センター」総括研究員。センターでは、地域の社会・経済・環境に関する情報や知見の総合的な解析、地域住民のニーズに基づく望ましい将来社会の姿の定量的な描出などの取り組みを重ね、持続可能な滋賀社会の構築を目指した研究を行っている。

木村道徳
KIMURA Michinori

「滋賀県琵琶湖環境科学研究センター」主任研究員。センターでは、持続可能な滋賀社会の実現に向けた社会実装研究の一環として、市民参加型のワークショップや地域調査などにも力を入れ、環境と調和のとれた地域社会の姿を市民と共に考えている。

上坂達雄
KOUSAKA Tatsuo

「仰木地区活性化委員会」元会長。大学に隣接する比叡山延暦寺の麓、千二百余年の歴史と伝承が今も息づく仰木集落で生まれ育ち、棚田の保全や、仰木の風土・文化を後世に伝えている。現在も仰木地区活性化委員会の元会長として仰木の人々をリードし続け、自然を愛し、健康を願い、夢をかなえる活動に取り組む。

小林 徹
KOBAYASHI Toru

「オプテックスグループ 株式会社」取締役相談役。世界初の逸赤外線式自動ドアセンサーを製品化するところから出発し、セキュリティ分野など多岐にわたる事業を国際的に展開するベンチャー企業に成長させた起業家。一方で、琵琶湖の環境や青少年の育成に関わる社会貢献活動を熱心に行う。

左嵜謙祐
SAZAKI Kensuke

「有限会社 魚治」7代目治右衛門。高島市旧海津港近くで1748年から続く鮒寿しの老舗を受け継ぐ。鮒寿しづくりを通して得る自然との共生のあり方を日々の生業のあり様から検証し、その手法を考える。そして、歴史、風土に裏付けられた地域文化の継承と、とりまく環境と世界観から持続可能社会を問う。

清水安治
SHIMIZU Yasuharu

「株式会社エーゼログループ」統括ディレクター、「NPO法人 結びめ」代表理事。前職は滋賀県職員。農福連携事業、障がい福祉サービス就労継続支援B型事業所「ホトラ舎」を開所し、ローカルベンチャーを進めている。その他、空き家や空き施設を利用する移住促進や地産地消の木の家づくりなど、地域活性化に向けて様々な活動を行う。

冨田泰伸
TOMITA Yasunobu

「冨田酒造有限会社」代表取締役。天文年間創業の造り酒屋15代目蔵元。他県産の山田錦に頼っていた酒米を、滋賀県産のみの酒米に切り替えたパイオニア。奥伊吹山系の伏流水と、地元篤農家の減農薬栽培米を主に使ったこだわりの名酒「七本鎗」を醸造しながら、新商品の開発を通して地域文化の発信を積極的に行う。

福家俊彦
FUKE Toshihiko

「天台寺門宗総本山 三井寺」長史。阿闍梨、大僧正。比叡山延暦寺や石山寺と並んで滋賀県を代表する古刹の一つである三井寺の執事長。三井寺は、国宝、重要文化財に指定された多くの建造物や絵画、彫刻を有する寺院としても知られ、その文化的資源を地域の活性化や、教育に活かす試みを日々続けている。

山本昌仁
YAMAMOTO Masahito

「たねやグループ」CEO。滋賀県を代表し、全国に展開する菓子舗グループの最高経営責任者。「自然に学ぶ」を常に考え、2015年近江八幡北ノ庄に「ラ コリーナ近江八幡」をオープン。菓子づくりを通じて人と自然の関係を結び、次世代につないでいくことを目的に様々な活動に取り組む。

《学びを深め、世界を広げてくれる連携研究組織》

地域実践領域 × 滋賀県琵琶湖環境科学研究センター

地域実践領域では、滋賀県琵琶湖環境科学研究センター（通称：琵環センター）と連携し授業を行っています。当センターの金（キム） 再奎（ゼギュ）研究員（本学招聘教員）、木村道徳研究員（本学招聘教員）、岩川貴志研究員（本学非常勤講師）の3名の研究員に担当いただき、琵琶湖とその周辺地域をデータに基づいて検証することや、複雑な社会のシステムを学びます。琵環センターのことや研究内容についてキムさんにお聞きしました。

――琵環センターはどんなことを研究されているのですか？

①琵琶湖流域生態系の保全・再生、②環境リスク低減による安全・安心の確保、③豊かさを実感できる持続可能な社会の構築、この3つの琵琶湖環境における基本的課題に対応できるよう日々研究を重ねています。継続的なモニタリングや調査で現状を把握しながら、社会・経済・環境に関する情報や知見の総合的な解析を通じて、滋賀をモデルとした持続可能な社会の構築を実現する政策提言や課題提起も行っています。

――キムさんの研究の内容は？

気候変動や人口急減・超高齢化という、地域が直面する大きな課題に対し、各地域がそれぞれの特徴を活かした自律的で持続的な社会創生が求められています。このような課題への試みとして、「持続可能な地域の将来ビジョンづくりの手法」と、その実現のための「進行管理の手法」について研究しています。地域に眠っている自然資本や人工資本を再活用し、地域の多様な人材に主体的に参加してもらうことで、人的資本や社会関係資本を最大限に活かせると考えています。

――地域実践領域の学生に何を教えていますか？

地域課題の発見と共有、その解決のための方策を見出すには、地域に関する多様なデータから重要な事柄を読み取り、その結果を可視化することが不可欠です。そのため、地域の社会経済環境に関するデータの収集や分析手法、その結果の可視化の方法について教えています。併せて、地域の観察からそこにある問題を発見し、それをトータルに理解する方法である「システム思考法」、地域に現れるパターンを読み取り、重要な要素間の関係性を理解する方法について教えています。これらの一連のプロセスを通じて地域を理解し、望ましい地域の将来ビジョンづくりに発展させる手法の習得を目指しています。

――大学との連携の可能性は？

大学は、地域に根差した持続可能な地域づくりを進める上での貴重な資源の一つであり、重要なパートナーです。地域の課題に関する調査研究のみならず、人材の育成や地域づくりの担い手の育成などの面で連携できると考えています。気候変動や資源の枯渇といった地球規模での環境問題の深刻化とともに、地域レベルでは少子高齢化や人口減少による限界集落の増加、遊休資源の増加、地域コミュニティーの崩壊など、地域が直面している課題は多岐にわたります。また、多様化・高度化する地域住民のニーズに対し、地域の特徴を活かした持続可能な地域づくりを進めていくためには、行政だけでなく、大学などの研究者や地域住民、事業者などの協力が不可欠であり、幅広いネットワークの形成が必要です。

地域実践領域のWebサイトでは授業やフィールドワークの様子をブログや動画で紹介しています。

最新の授業レポートや学生インタビュー動画などを更新中。大学案内だけでは伝えきれない地域実践領域の学びを紹介しています。もっと詳しく地域実践領域を知りたい人は、QRコードからWebサイトをのぞいてみてください。

2年生、長浜の森と湖へ！
2023/12/15
今週の二年生も、元気にフィールドワーク！...
read more

針江地域の素材でつくる、をふり返ります！
2023/11/13
「地域の素材でつくる２（地域企業との共創...
read more

地元に帰ってお土産開発！！後期はじまりました
2023/10/06
出身地をお土産で紹介する「一年生　お土産...
read more

地域実践領域の学生に学びや活動についてインタビューしました

動画でみる地域実践領域

地域実践領域ってなにするの？
先生と学生に詳しく聞いてみた！

地域実践領域 学生活動紹介
「マルシェとデザインと農業と観光」

地域実践領域 学生活動紹介
「出版と児童クラブと図書室」

ブログと動画はこちら

[芸術学部 芸術学科]

総合領域
イラストレーション領域
美術領域
情報デザイン領域
空間デザイン領域
地域実践領域

携帯・スマートフォンの方は
こちらのQRコードから
アクセスしてください。

[地域実践領域 制作メンバー]
デザイン：浅野豪[写真クラス卒業生]
写真：山崎純敬[写真クラス卒業生]（表紙）、浅野豪[写真クラス卒業生]（p.06-07）
編集・取材：西川有紀[モーラ]
イラスト：すずきあい[niwa／印刷クラス卒業生]
テキスト：加藤賢治・石川亮・山田真実[地域実践領域教員]
印刷：大伸社
発行：成安造形大学 入学広報センター
発行日：2024年4月1日
〒520-0248 滋賀県大津市仰木の里東 4-3-1
Tel: 077 574 2119　Fax: 077 574 2120
E-mail: nyushi@seian.ac.jp　URL: www.seian.ac.jp
本書からの無断転載を禁じます。
また掲載内容は、2024年3月現在のものであり、一部変更される場合があります。
なお、最新情報については本学Webサイトをご覧ください。

OPEN CAMPUS 2024

1st 4/21[日]　2nd 6/2[日]　3rd 7/21[日]　4th 8/25[日]

[ACCESS]

京都から20分	JR湖西線普通	JRおごと温泉駅
大阪から46分	JR京都線新快速・JR湖西線普通	
神戸から65分	JR神戸線新快速・JR京都線新快速・JR湖西線普通	

駅前からは無料のスクールバスで約3分

【　　】

成安造形大学

information

地域実践領域の“ひと味ちがう”学費と試験

授業料は“年間90万円”、だから安心して学べる、通える

入学時に必要な経費や卒業までにかかる学費を、
他領域よりも低く設定しています。学部共通の制作施設も
他領域と同じように使用できるので、4年間安心して学べます。

“あなたのまちを紹介”する独自の面接試験も選べる

全領域共通の作品持参による面接試験とは別に、地域実践領域では
「自分のまちを紹介できるモノ3つ」を持参した面接試験も実施。
地域を調べた探究学習の成果なども面接試験に活用できます。